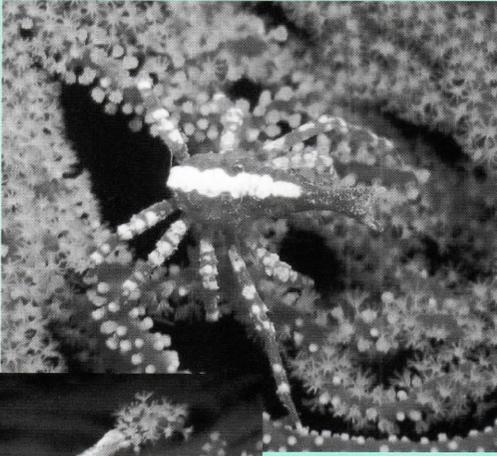


イソバナガニ

Xenocarcinus depressus Miers, 1874



クモガニ類は擬態の名人ぞろいだ。甲羅や脚に、周辺にあるゴミや生物などを付けて、景色に溶け込んでいるものも多く、もっとも有名なのはモクスショイだろう。阿嘉島周辺では個体数も多く、カイメンや海藻の小片を身にまとうって海底をのっそりと移動しているのを夜の海でよく見かける。写真のイソバナガニもよく目にするクモガニ類の一つだ。数が多いわけではないが、固着性刺胞動物のイソバナ類を棲みかにはしているので、イソバナのあるところを探すと、たいがい見られるのである。色鮮やかな赤色の体に黄色や白の斑があり、モクスショイと違い甲らの上には何もつけていないから、ふつうなら大変目立つはずだが、その色彩は宿主のイソバナとそっくりで、よく見ないと見落とすほどに見事に背景に同化している。イソバナガニも時にはイソバナの一部を体に付けているが、それは長く伸びた額角の先端に限られる。まるでチロリアンハットの飾り羽のようだ（左下の写真）。

撮影：岩尾研二

撮影日：2011年6月21日、7月25日

場所：阿嘉島マジャンハマ

編集後記

編集 岩尾研二（研究員）

阿嘉島臨海研究所の歴史もすでに20年を過ぎ、多くの成果が得られてきました。今号に寄せてもらった記事にあるように大森 信所長が日本サンゴ礁学会賞を受賞したことは、そうした成果が評価された部分もあるのだらうと思います。しかし、20余年の蓄積の中には、未だ日の目を見ていない研究がたくさんあります。卒業論文や修士論文、あるいは研究所の施設利用報告書としてはひとまずまとめられているけれども、広く公表するには至っていないものが数多く残されているのです。それらはどれも貴重な情報を含んでいるのですが、データが不足していたり、再現性が疑わしかったり、内容が乏しかったりして、個々に取りまとめるには不十分と思われるのです。けれども、それらを組み合わせたり、その後の研究報告を参考資料として考察し直したりすることで、説得力のある結論にたどりつけることもあります。藤村俊一郎さんらによるサンゴの卵や幼生の分散の研究はその一つで、著者の方々の努力のおかげで今号に掲載することができました。今は埋もれているそうした資料も阿嘉島臨海研究所の大切な成果です。すこしずつでも整理して、それらに光を当てられれば、と思っています。



発行人
ESTABLISHMENT OF TROPICAL MARINE ECOLOGICAL RESEARCH

財団法人熱帯海洋生態研究振興財団

〒141-0031 東京都品川区西五反田1-26-2 五反田サンハイツ614号 TEL. 03-3490-7266 FAX. 03-3490-8278

AKAJIMA MARINE SCIENCE LABORATORY

阿嘉島臨海研究所

〒901-3311 沖縄県島尻郡座間味村字阿嘉179 TEL. 098-987-2304 FAX. 098-987-2875
E-mail: amsl@oki-zamami.jp Homepage URL: <http://www.amsl.or.jp>